

移り行く30年 変わる風景

— JR札幌駅北口 —

昭和47(1972)年に誕生した北区。当時、約13万人だった人口は今や27万人を超え、この間、地下鉄南北線の麻生延伸(昭和53(1978)年)やJR函館本線〔苗穂—琴似間〕と札幌線(学園都市線)〔桑園—新川間〕の鉄道高架化完成(昭和63(1988)年)、ニュータウンあいの里完成(平成2(1990)年)など北区の街並みは大きく様変わりしました。

今回取り上げるのは、札幌の玄関口であるとともに、北区の南側の玄関口でもある「JR札幌駅」の北口とその周辺。約30年の移り変わりを、定点撮影した写真でご紹介します。

◆北区北7条西3丁目東側交差点付近から南西に同北口を望む



写真2 現在

写真1 昭和45(1970)年ころ

かつてJR札幌駅北側には、石炭を運び出す専用の線路が敷かれ、炭鉱会社の事務所や石炭を売る店舗が軒を並べていました。やがて札幌駅を利用する人々の増加とともに、同駅は旅客専用駅と

周辺の街並みに目を移してみると、同北口の開設を機に、徐々にビルが建ち始めました。それでも写真3を見ると、まだまだ

なり、貨物の取り扱いが桑園、苗穂、東札幌(当時)駅に移行。うず高く積まれた石炭の山は、昭和三十三年(一九五八)年ころには姿を消して行きます。そして、昭和三十八(一九六三)年に同北口が開設されると、車のロータリーやタクシー乗り場が設置された駅前広場が整備され、利用しやすくなりました。写真1とは言うものの、北区の玄関口としてはいささか物寂しい様子でした。その状況を一変させたのは、昭和六十三(一九八八)年に完成した鉄道高架化による新しい駅舎の誕生です。高架化された線路とともにプラットホームが二階に移り、一階と地下には商店街が開業しました。また、コンコースで南北を自由に行き来できるようになるなど、駅機能は格段に向上。路線バスや観光バスが発着し、人々が行き交う、玄関口にふさわしい姿となりました。その後、平成十(一九九八)年に地下駐車場や地下歩道などを備えた「きた未来広場」が完成し、現在に至っています。写真2。

◆中央区北5条西5丁目センチュリーロイヤルホテル屋上から北東に同北口周辺を望む



写真4 現在

写真3 昭和48(1973)年ころ

だ高層の建物が少ないため、遠くの景色まで見渡すことができます。そして現在。同じ場所から眺めてみると写真4、線路と交差していた陸橋は鉄道高架化とともに姿を消し、ホテルやオフィスビルが、高層からの視界をも遮るほどに林立するようになりました。あまり